

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

| | | | |
|--|--------------------|------------------------|----------------|
| 博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.) | 博士 (文学) Ph.D. | 氏名 (Candidate Name) | Dewi Anggraeni |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1・2項該当 | | |
| 論文題目 (Title of Dissertation) | | | |
| 戦前・戦中の日本人作家による南方表象の研究—インドネシアを中心に | | | |
| 論文審査担当者 (The Dissertation Committee) | | | |
| 主査 (Name of the Committee Chair) | 准教授 | 下岡 友加 | |
| 審査委員 (Name of the Committee Member) | 教授 | 久保田 啓一 | |
| 審査委員 (Name of the Committee Member) | 教授 | 川口 隆行 | |
| 審査委員 (Name of the Committee Member) | 教授 | 西原 大輔 (東京外国語大学) | |
| 〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation) | | | |
| <p>本論文は、「移動」と「帝国」という二つの観点から、太平洋戦争開戦前から戦時中にかけて「南方」を訪れた日本人作家の「南方」表象を対象に考察を行ったものである。分析の理論的枠組みとしてMary Louise Pratt「接触領域」(contact zone)の概念を採用し、非対称的な力関係のもとで異文化が出会い、相互に衝突する様相、すなわち帝国内において植民者と被植民者が不平等な関係性のもとで相互に影響し合うプロセスを論じた。</p> <p>本論文は序章・終章を含めた全九章から成る。 論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>序章では、本研究の背景として、日本人作家と「南方」表象の関わりを論じる従来の研究成果を踏まえた上で、その問題点を指摘する。本論文は、「南方」が1930年から1940年代にかけて、ヨーロッパの植民地であると同時に、日本「帝国」の拡大の目的地でもあったという位置づけを重視し、具体的に以下7名の日本人作家の文学表象を論じる。</p> <p>第1部第1章では、金子光晴『マレー蘭印紀行』を分析対象とし、イギリスの植民地主義言説に典型的に見られる人種的な偏見が本作品でも反復されていることを論じた。</p> <p>第2章では、高見順「諸民族」を分析対象とし、ヨーロッパ人の振る舞いを模倣する現地の人々の近代性を無視し、彼らを「野蛮な」他者として位置づけようとする語りの方針について論じた。</p> <p>第2部第3章では、寒川光太郎「黒い瞳」を分析対象とし、欧亜混血人と先住民が互いに序列をつけあうという、インドネシアにおける多人種間の力関係とその流動性を描く、本作品の独自の位置について論じた。</p> <p>第4章では、阿部知二「血と土と心—エルベルフェルトのことなど」を分析対象とし、18世紀に実際に起こった反逆事件を再構成する語り、欧亜混血人を生来的な「裏切り者」として表象するという、日本軍政の政策を考慮したものであることを論じた。</p> <p>第5章では、佐多稲子「髪の手紙」を分析対象とし、欧亜混血人と華僑が植民地空間から「他者」として排除された上、その疎外がジェンダー・人種の二重に及んでいることを論じた。</p> <p>第6章では、北原武夫「インドネシア人の性格」を分析対象とし、そこで行われている否定的なインドネシア人表象が「大東亜共栄圏」建設促進のためのプロパガンダに帰着することを論じた。</p> <p>第7章では、間宮茂輔「基地の生活」を分析対象とし、オランダの植民地政策が生み出した知識人の存在や民族主義運動を行うインドネシアの近代性を隠蔽する語りについて論じた。</p> <p>終章では、各章の概要、研究の成果、日本人作家による「南方」表象に共通する傾向、本研究の今後の課題等について論じた。</p> | | | |

本論文は、次の三点で高く評価できる。

1. 背景を異にする7名の日本人作家による「南方」表象を検討することで、日本近代作家による「南方」表象の諸相並びに共通する特徴を明らかにするとともに、各作家・各作品研究の進展に寄与している点。
2. 日本人作家たちによる「南方」表象の検討を通じて、そのプロパガンダ性を明らかにするとともに、長くヨーロッパの支配下にあった「南方」における多民族社会の複雑性と支配の困難を浮き彫りにすることで、日本「帝国」史研究、植民地研究に寄与する資料と考察を提出している点。
3. 日本人作家たちによる「南方」表象の検討を通じて、彼ら／彼女の捉えた1930年から1940年代におけるインドネシアを中心とする「南方のリアリティ」を明らかにしたことで、日本語文献に基づくインドネシア社会・歴史・地域研究に寄与する資料と考察を提出している点。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 5年 12月 26日

備考 要旨は、A4版2枚（1,500字程度）以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed A4 size, 2 pages (about 500 words).)